

## 20世紀前半の中国におけるナショナリズム高揚と教科書

倉田 明子

### 0. はじめに

◇「国恥地図」をめぐる報道 【資料①、②】

→現在の中国への警戒心を背景とした解釈

◇ロシア:ウクライナ=中国:台湾??

★その時代、その場所に立ち返って考えることも必要?

★「愛国教育」は共産党政権、ましてや習近平政権だけの問題ではない

☆並木頼寿、大里浩秋、砂山幸雄編『近代中国・教科書と日本』研文出版、2010年

### 1. 中国における近代教育と教科書の歴史

◇近代教育の歴史

宣教師の教会学校→

洋務運動期の新式学堂 → 戊戌変法による教育改革 → 光緒新政 → 民国期

※大学堂の設立

※科挙廃止と学制改革

◇教科書の歴史

翻訳教科書

民間での教科書編纂 ← 審定(検定)制開始 → 継続

→ 国定教科書への試み(本格実施は戦後)

☆中華人民共和国の教科書制度

国定教科書→検定教科書(1986年~)

☆台湾(中華民国)の教科書制度

国定教科書→検定教科書(小学1996年~、中学2002年~)

### 2. ナショナリズムと教科書① 「領土空間」・「疆域空間」・「国恥」

◆黄東蘭「清末・民国地理教科書の空間表象」(☆所収、pp.233-265)

◇「領土空間」と「疆域空間」

近代的概念としての「国境線」に囲まれた「領土」

←→ 伝統的な「国土の広がり」、同心円的な支配、朝貢国も概念的には「疆域」に含む

※「天下」「天子」→概念的には全世界の皇帝

◇清末・民国期の地理教科書

中国の境域は「領土空間」として表象→近隣国についての記述には警戒感が強まっていく

「英領」「仏領」→「四大国」

平行して「失われた疆域」＝「失地」の表象も

：朝貢国／不平等条約による割譲地／租借地や日本支配下の東北

※過去の地理と現在的地理は明確に区別

「痛み」と「恥」としての失地：清朝の腐敗と列強の侵略による国土喪失

1930年代の地理教科書では近代主権国家の理念に基づいた「領土」「領海」を記述

→取り戻すべき「失地」は不平等条約で租借された国土、モンゴル、東北、パミール高原など

◇「国恥図」

「現国界」と「旧国界」：過去の観念上の流動的な境界線を可視化したのが「旧国界」

失われた边疆／失われた藩属（朝貢国）／租借地・租界 を区別して説明

→過去と現実の地理空間のコントラストを「痛み」「国恥」として可視化

※背景にあるのは日本の侵略による中国「存亡の秋」への危機感

### 3. ナショナリズムと教科書② 民族・神話

◇国語教科書における「民族」の扱い

1913年の『共和国教科書 新国文』：中華民国の全民族は黄帝に由来する同一の祖先を持つ、

本来同一の民族→分化したが、中華民国成立により再び同化へ

◇歴史教科書における黄帝

清末の歴史教科書：天下を統一した最初の帝王／中国文明を集大成／漢族（黄種）の始祖

歴史発展論などの西洋思想の影響も受けながら、黄帝などの神話伝説を「歴史」に取り込み

考古学的成果と神話伝説の結合

※多民族、広大な国家を統一するためのナショナリズム

### 4. 終わりに

ナショナリズムは誰のためのものか

資料①

産経新聞

# 中国がこだわる「台湾統一」のなぜ？

## 東・南シナ海や沖縄も「国恥地図」の歴史認識が背景

2021/12/13 01:00 [河崎 真澄](#) 有料会員記事

**河崎真澄の中台兩岸特派員**

中国が、かつての領有地、として赤い線で「旧国境」を描いた1933年版の「中華国恥図」。サハリンやシベリア、沖縄や台湾、東南アジアなども、奪われた領土、であり「国の恥だ」として、当時の小学校教科書に掲載された（米在住ノンフィクション作家・譚璐美氏所蔵）

中国が台湾への軍事的威嚇を強め、戦闘機や爆撃機などを台湾の防空識別圏（ADIZ）に繰り返し進入させている。「台湾は中国の不可分の領土であり核心的利益だ」と主張し、東・南シナ海でも覇権的な動きを絶え間なく続けている。

だが、そもそも中国がなぜ、日米欧など国際社会から強硬な反発を招きながらも、周辺地域の、縄張り意識、を決して捨てず、台湾統一も悲願にするのか。

その領土的野心の背景として「中国国恥（こくち）地図」の存在を指摘したのが、米在住ノンフィクション作家、譚璐美（たん・ろみ）さんの新刊「中国『国恥地図』の謎を解く」（新潮新書）だ。「かつて列強に奪われた領土は、すなわち国の恥だ」との民族意識が地図から読み取れるという。

国際法や国際秩序には関わりなく、過去の恨みを拡大解釈してビジュアル化した100年近く前の古地図を根拠に、中国は、失地回復、をめざして国際社会と対峙（たいじ）しようとしている。

□□

同書に掲載された譚さん所蔵の1933年版「中華国恥図」は、サハリンやシベリア、モンゴルやカザフスタン、アフガニスタンやネパール、さらに沖縄や台湾、南シナ海や東南アジアまでを「中国の旧国境」として赤線で囲んでいる。

地図では旧国境と称しているが、例えば沖縄やマレーシア、カザフなどがこの国の「領土」であった歴史など、どこにもない。

譚さんによると、こうした国恥地図は少なくとも10種類以上ある。旧国境というよりは、中国（現在の中華人民共和国ではなく広義の中国）の影響力が歴史的に多少なりとも及んだ、とその当時の中国人が考えた地域と受け止められる。

同書にみるさまざまな国恥地図の版図は、いくぶん異なっており、どれも観念的な印象をぬぐえない。

□□

譚さん所蔵の「中華国恥図」は現在の中国より以前の「中華民国」時代、33年発行の小学生向け地理教科書に掲載されていた。「中国国恥誌略」とする解説文で小学生に「国の恥」とは何かを細かく説いていた。

#### <喪失した辺境>

ロシアや英国、日本、フランスによる領土喪失として、サハリンや旧満州など東北地区、モンゴルやミャンマー、台湾、香港やマカオなどを列挙している。

#### <撤廃された藩邦>

周辺の朝貢国などを属国扱いの藩邦（はんぽう）として琉球（沖縄）、朝鮮、フィリピンの一部、安南（ベトナム）やシャム（タイ）、ブータンやアフガニスタンなど。

#### <租借された地域>

日本が租借した遼東半島や、英国が租借した九竜半島北部（香港北部）、上海やアモイ、天津などの租界地・外国人居留地、日本が管理下に置いた南満州鉄道の付属地などを挙げた。

□□

譚さんは同書でこう綴（つづ）っている。「国恥地図はかつて清朝時代の藩邦だった中央アジア、朝貢国や準朝貢国だった東南アジアの国々が独立したり、西欧諸国によって植民地化されたりしたことを理由に、中国固有の領土空間が失われたと解釈した」と。さらに

「中国の威光が及ぶ支配地域であり、`本来の姿、に立ち返ることが当然なのだ」と印象付けようとしたのが、国恥地図が発するメッセージである」と解釈している。

「近代地図が、中国ではナショナリズムの高揚感を沸き立たせる道具として利用され、プロパガンダ（政治宣伝）の一部として作為的に生み出された歴史物語に他ならない」という。

かつて描いたファンタジーであっても、「中国人の深層心理に刻み込まれ、現代中国がかかえる`闇（やみ）、の真相となっている」と譚さんは鋭く指摘している。

昨今の台湾海峡や東・南シナ海などでの威嚇的な軍事行動を正当化しようとする中国当局の発言を考えれば、`失地回復、の怨恨（えんこん）が脈々と引き継がれていることは容易に想像できる。

□□

2021年6月の先進7カ国首脳会議（G7サミット）は英国で、「台湾海峡の平和および安定の重要性を強調し、兩岸問題の平和的な解決を促す」との首脳宣言を採択した。G7首脳宣言が台湾問題に言及したのは初めて。国際社会は中国による台湾への武力行使に、強い警告を発した。

だが中国外務省の報道官は「内政干渉だ。（とりわけ）米国は病気だ」と強く非難し、国際社会との対立はこの半年で激化した。

中国人の歴史的な失地意識と、ナショナリズムに支えられた`倍返し、ともいえる反転攻勢の裏には、冷静に国際情勢を説く中国人まで「裏切り者」と切って捨てる全体主義が潜む。現在の中国では誰ひとり、反論など許されないのだ。

譚さんは、「国恥地図は過去の栄光と現実の落差を埋め、慰めと癒（いや）しを与えてくれる`魔法の鏡、。中国は一刻も早く、このトラウマや幻想と決別すべき。さもなくば、世界から信頼されて、尊敬される国家にはなり得ない」と説いた。

中国は万が一、台湾を手中に収めたとしても、次は沖縄、南シナ海の全域、東南アジアと、中国は`雪辱、の戦いを永遠に続けるのだろうか。それこそが「恥知らず」な人々の行為とも自覚せずに。

（論説委員兼特別記者）

## 資料②

- 朝日新聞デジタル

### 「国恥地図」に秘められた帝国の記憶 世界秩序揺さぶる中国の歴史観

北京=林望 2022年4月21日 11時00分



「中国国恥地図」と題する一枚の古い地図がある。

今から95年前、中国が列強の侵略を受けて半植民地状態にあった時代に、上海の中華書局という出版社が世に出したものだ。

地図の桃色の部分は「現存する土地」、緑色は「失われた土地」、ダイダイ色は「重複する土地」とある。重複する土地とは、今の言葉でいえば複数の国の主張がぶつかる係争地くらいの意味だろうか。

とりわけ目を引くのは、ほぼアジア全域を囲む青い線だ。北はシベリア南部や樺太、東は朝鮮半島や沖縄、台湾を取り込み、南はマラッカ海峡やネパールをかすめて、西はアフガニスタンやカスピ海東岸の中央アジアまで伸びている。いまの中華人民共和国の、ほぼ倍にあたる面積が囲われている。

20世紀初めまで続いた王朝時代の中国と朝貢関係にあった国々が含まれていることは見て取れるが、「かつての国境」と記されたこの青い線について、地図は法的根拠も、いつの時代のものなのかも説明していない。

「国恥」という激烈な名前をつけられたこの地図は何を伝えようとしているのか。

地図は英ロンドン大学経済政治学院教授のウィリアム・キャラハンが、2004年ごろに香港中文大学の図書館で見つけた。地図や広告などが映し出す国家や社会の意識に着目するキャラハンは、「帝国時代の宇宙観と、近代的な地理観念をない交ぜにしながら、当時の中国人にとっての『本来あるべき中国の姿』を主張したものだ」と指摘する。

実は「国恥地図」と呼ばれる地図は、中国に数多く残っている。列強の侵略を許した清朝を憂国の志士たちが倒した辛亥（しんがい）革命以降、日本との全面戦争が始まる1937年までの間に中国各地の出版社や政府系機関によって相次いで発行された。種類や内容は様々だが、壁掛け用の大きなものが多いのは、愛国の志を育てるために学校の教室で使われることを想定していたからだという。

いずれも近代の地図に求められる法的、科学的な根拠を欠いており、中国の学者が「地図と言うより当時の悲憤の発露」と位置づける代物だ。

キャラハンも、国恥地図が示す世界観は現代中国人にとって一般的なものではないと強調しつつ、東アジアに君臨した帝国時代の残像は「今も中国の政府関係者や学者、一般市民の領土意識の中に息づいている」とみる。

たとえば、共産党政権が愛国主義教育を強めた1990年代、政府直系の人民出版社は「近代中国 百年国恥地図」という冊子を発行した。副教材として使えるよう編集された冊子は「子や孫の代まで祖国が受けた恥辱を忘れず、血と涙の歴史を忘れないようにするために」とうたい、列強による侵略の歴史や割譲された領土を図説する。

## 習近平が「ネルソン・マンデラ級」と言われたわけ

中国の人々の潜在意識に、帝国時代の記憶を読み取るのはキャラハンだけではない。

「彼らの思考の中心にあるのは、彼らが植民地化され、搾取と屈辱を受ける以前の世界である」

シンガポールの国父と呼ばれた故リー・クワンユーは2011年、ハーバード大学教授のグラハム・アリソンらのインタビューで中国共産党政権の指導者たちについてこう語った。

改革開放政策で、共産党の一党支配と経済の市場化を同時に進める道を選んだ中国は、そのモデルの一つをシンガポールに求めた。自らも中国にルーツを持つリーは、中国の歴代指導者たちと重ねた交流を通して、彼らの意識の底に潜む中国のあるべき像や世界の姿を感じとっていたのだろう。

共産党総書記として中国を率いる習近平も、生前のリーに会ったことがある。リーはその意味を詳しく語らなかったが、習を「鉄の意思を持つネルソン・マンデラ級の人物」と称し、獄中から南アフリカで初の黒人大統領まで登り詰めた現代の偉人にたとえた。

その後、最高指導者となった習の言動にも、中国が背負う歴史の屈辱を晴らそうという情念に似た思いがほとぼしることがある。

### 「失地回復」の執念は、あの海にも

台湾を割譲した日清戦争から120年後の2014年、台湾から国民党名誉主席の連戦を招いた時には「甲午戦争（日清戦争）では、我々の国力が薄弱だったために台湾を外族に侵略されるに至った。これは中華民族の歴史において最も悲惨な1ページだ。我々が一つの国家であり、一つの民族であることはこれまでも、これからも変わることはない」と語りかけた。

「失地回復」への中国の強い執着があらわれるいま一つの場所がある。南シナ海だ。国際社会の批判をよそに、実効支配を強める動きが止まらない。中国は「国連を中心とする国際秩序の守護者」を自任するが、領土や海洋権益をめぐるっては、自らが国力を蓄える前に欧米が築いたルールへの不満を隠さず、独自の歴史観で世界秩序を揺さぶっている。

この冬、習は北京冬季五輪の開会式にプーチンを招き、中口の新たな共同声明を発表した。欧米への対抗意識を前面に打ち出した声明は、冒頭でこううたい上げている。

「世界はいままさに大変革の時代を迎えている。世界は多極化し、国際秩序の変革は続く」

それから1カ月を待たず、プーチンは「ウクライナは我々の歴史の一部だ」と語り、ウクライナ侵攻に乗り出した。その暴挙と世界の反応を目にして、習は何を思うのか。緊張が高まりゆく台湾海峡、南シナ海、インドシナ、そして



南アジア——。国恥地図が示す「帝国の残像」が及ぶ地域の動きを通して、習と中国が描く世界の姿を探る。（文中敬称略）（北京＝林望）